

---

# もう一つの物語

れいん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もう一つの物語

### 【Nコード】

N9637Q

### 【作者名】

れいん

### 【あらすじ】

心の奥底で誰かを探しているような、そんな毎日を送っている、ある、男女。

男は、教会で誰かの声を聞きそこから何かが始まっていく。

有名な悲劇の恋愛をもとにしたオリジナル小説。

？

ここには唯一の女の子が住んでいる。

ローラという、緑色の髪で目の色が淡いピンク色でワンピースが良く似合う女の子だ。

教会に住んでたらしいが、じーさんに誘われてここで働くというか住むことになって、家事全般はローラ担当。

あまり、口を利かないほうだが、ミランの前ではとても元気そうに幸せそうで

ミランのほうも、ローラに好意を寄せていて、毎回のように柔らかく愛おしそうに見つめて笑っている。

・・・俺にもそういう存在がいればいいのにな。

深いため息を着いた瞬間に、鼻に食欲をそそるにおいが漂ってくる。じーさんとミラン、ローラとロランで食卓を囲む。

たちまち、育ち盛りの男の子で晩飯はなくなっていく。

ローラが片づけ始めると、それと同時にじーさんが重苦しそうな顔で「お前ら、いつもいつも何しに街に行つて走りまわつとるんじゃ？」

呆れたように言うじーさんは、片目だけで睨むように二人を見る。

二人は、顔を見合わせ、ミランはじーさんに納得するように、首を縦に振ると

ロランを見た。

二人に見つめられてるロランは、少し間をおいて答えた。

「なんだか、俺って誰か探してるような気がするんだよ」  
自分でもあいまいなようで首をかしげながら、答えた。

今度はじーさんとミランが顔を見合わせ、思い切り笑った。

「ははははははははははっ！」

「お前、あいまいなのに、走つてたのか？バカな奴だなあ」

笑いながら、言われてロランはとても悔しそうな、苦々しい顔をしていた。

「笑うなって！まあ、二人とも聞いてくれよ。実はな・・・」  
ロランは思いつめたように、下を向くと途端に笑い声がおさまり  
話に聞き入っていた。

俺、ずっと前から、なんだか生きていても、なんて言ったらいいん  
だろうな。

なんか生きてるけど生きていないっていうか、なんか寂しいんだよ  
な。

俺の所には、確かに落ちつけて自分が心を開けるような人がいたと  
思うんだ。

毎回のように、夢に出てくるけど、顔が出てこなくてぼやけて見え  
るんだけど・・・。

赤色の髪で、手には赤いバラの花束を持っていて、風になびいてる  
んだ。

その姿を見ると、嬉しいような悲しいような  
でも、会えて幸せっていう気分になるんだ。

そういう感情になったときが一度だけ会ったんだ。

夢の中に出てきた彼女が、あの城に住んでいる、お姫様に似ていた  
んだ。

この前、パレードがあっただろ？

その時、俺、お姫様が髪飾りを落としてしまったんだよ。

拾って渡したら、朗らかな顔で本当にきれいな顔で

「ありがとう」

それだけで、なんだか懐かしい感じがしたんだ。

おかしいんだけど、なんか前にも会っていたような気がして・・・。

それで、このヴェローナのお姫様なら

どこかで会えるんじゃないかと思って

まあ、会えないとは思ってんだけど

走って走って、あの感情が湧きおこったら彼女が近くにいるってこ  
とになるんだ。

俺は、もう1回彼女に会うまで走り続けると決めたんだ。

？

「・・・お前、家に着いた時だけ元気出るよな。いつか引きこもりになってもしらねえぞ」

深いため息をついて、ドアノブを回したとたん、桶が二人の顔面に突撃した。

それも、説教付きで・・・。

「お前ら、日が暮れようとしてるのに、いつまで出かけ取るんじゃ！日が暮れる前には帰って来いと言ってただろう！」

ひげもじゃで、痩せてる、60代ぐらいの男が二人の前に、赤い顔で立ちはだかる。

じいさんといっても、筋肉質なほうで背は曲がってないほうだと思う。

この家は、貧乏というほど貧乏ではないけれど、じいさんは毎日つきはぎだらけの

いかにも貧乏くさい恰好をしている。

前に、理由を聞いたけれど答えてはくれなかった。

「じいさん、毎日説教ばかりしてつと早死にするぜ？俺、先に部屋戻るわ。ローラに

飯になつたら呼んでつて伝えといてな、ミラン」

「あつ、こら、待て・・・っ」

じいさんの説教を聞いてるといつのまにか子供は寝る時間っていう時間になつてるんだよな。

だから、こころへんで聞き流さないと。

屋根裏部屋のような隠れ部屋のような自室に入るといきおいよくベッドにダイブする。

一番落ち着くのが、ここなんだよな。

周りはとても殺風景で、ベッドと机とタンスぐらいしかない。

けれど、毎日この部屋を明るくしてくれるのが一つしかない窓。

ヴェローナの町をいつも見渡すことができる。

いわば、俺の特等席だ。

ここからは、キャピュレット家が住む城が見える。

キャピュレット家って、何かって？

このヴェローナを支配してるんだよ。

じーさんが、言うにはキャピュレット家とモンタギュー家っていう貴族が

王位の座を争っていたが、モンタギュー家が突然、姿をくらましてしまったって聞いた。

今は、どうなってしまったかわからない。

まあ、あの城のことも分かってないんだけどな。

窓の外を見ていると、扉の叩く音がした。

「ロラン！飯だつてよ」

威勢良く聞こえたのは、晩飯の知らせだった。

ベッドから腰を浮かせ、扉を開く前にもう一回城の明かりを見た。

・・・覚えてないだろうけどな。

？

ここは15世紀の、貴族と庶民の差別が繰り広げられる、イタリアの都市ヴェローナ。

ここから始まる舞台は、生まれ変わったとでも言うのでしょうか。ある物語の二人の切ない恋愛劇の続きと想ってくれてもかまいません。

この二人は、どうなるのでしょうか。

悲劇か、あるいは幸福か……。

それでは、舞台の始まりです……。

\*\*\*\*\*

「おい、待てよ！ロラン！」

どれくらい走り続けただろうか。後ろのほうにいた、親友ともいえるミランが息を切らしながらも俺を呼び続ける。

貴族の出ではないが、ひときわきらめく金髪で透き通るような青い瞳は女の子っぽさを表す。

……こいつが女の子だったらな。

毎回のように思う。こいつに言ったら、怒られるんだけどな。

日が沈もうとする海を背に、一人の男がミランを待つ。

真っ黒でつややかな髪に、琥珀色の瞳。見つめられたら、吸い込まれそうな雰囲気だ。

それでも貴族ではないというのが不思議でたまらない。

「遅えーぞ、ミラン。お前、一応男だろ？少しは、俺についてこいよ」

息を切らしてへたり込んでるミランを対照的にこれでもかというぐ

らいに元気があふれまくっているロラン。

「一応とはなんだ！それよりも、日が暮れんじやん。じーさんに怒られるぜ。まあ、帰ろうや」

「まじかよ。んじゃ、明日にするとするか」

塀にもたれかけていた腰を浮かせ、ミランを無理やり立たせる。

家が立ち並ぶところを抜け、一つの教会の前にたどり着いた。

教会に入るのではなく、もう一つの通路といったようなものが横にあり、その一本道を歩いた。

「やっと着いたな」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9637q/>

---

もう一つの物語

2011年10月8日19時29分発行